

青年期の友人関係が適応に及ぼす影響について

—友人に対する価値観と葛藤解決効力感に着目して—

金子功一¹⁾ 中谷素之²⁾

問題と目的

青年期の友人関係は、個人の適応や精神的健康に影響する重要な側面として繰り返し指摘されてきた(岡田, 2007; 丹野, 2008など)。青年にとって友人は、多くの時間をともに過ごし、悩みや考えを語り合う重要な存在であり、精神的健康に影響を与えるものである。

しかし一方で、友人との関係を模索する青年の存在を示す知見もみられる。例えば、岡田(1995)や上野・上瀬・松井・福富(1994)は、現代青年が自分も相手も傷つけないように、相手との過大な心理的距離をとろうとする傾向があることを指摘している。また、藤井(2001)は、友人とのジレンマ場面で青年は傷つきや葛藤を予期してトラブルを回避することによって心理的距離を保つとしているが、こうした回避的な対応を行うだけでは適切な関係の形成や維持にはつながらないと考えられる。実際、Newcomb, Bukowski, & Pattee(1993)は、仲間との建設的な葛藤解決能力の欠如が社会的拒絶などの不適応と関連することを指摘している。このことから青年は友人との心理的葛藤を適切に解決することが必要だといえる。

長峰(1999)は、対人葛藤場面における対人交渉過程(interpersonal conflict situations)では、自他双方の視点を考慮に入れた解決方略が問題を解決することにつながることを指摘し、青年期後期である大学生は、関係を維持する解決方略を多く行っていることを示している。その一方、回避方略などの解決に至らない対処は不適切とされている(藤森, 1989; 加藤, 2003など)。このことから、友人とのジレンマ場面においては、自他双方の視点を踏まえながら、自己を柔軟に調整し変化させることが適切な対処であると考えられる。

ここで、友人とのジレンマ場面における葛藤に対して

適切に対処するためにはどのような要因が必要であろうか。本研究では、友人とのジレンマ場面における葛藤を適切に解決できるかどうかに関する効力感に着目し、検討を行うこととする。また、こうした効力感について本研究では、ある特定の結果に必要とされる行為、ならびに遂行を実行できる可能性の認知(予期)を示すと定義する(Bandura, 1977)。坂野・東條(1986)は、ある特定の問題に対する自己効力感をもっている程度によって、不適応な反応や行動を変化できると指摘している。実際、宮崎(2011)は、認知症患者からの攻撃的な言動が生じることを未然に防ぐためには、患者の視点ならびに客観的な視点に立つだけではなく、相手の心理状態を推測し共感できるという自信である“共感効力感”をもつことによって介護職員の精神的負担を低減できるとしている。こうした研究知見は、相手との関係において葛藤が生じた際に、その葛藤に対して自らの行為や実行によって解決できるという効力感をもつことの有効性を示唆し、このような効力感をもつことが精神的な健康に影響を及ぼす可能性を示していると考えられる。

対人関係における自己効力感の先行研究について、Matsushima & Shiomi(2003)は中高生を対象に、「対人的スキルの自信」、「友人への信頼・安心感」、「友人からの信頼」の3下位尺度からなる対人的自己効力感尺度を構成している。また、松尾・新井(1998)は児童を対象に、対人的自己効力感を友人との対人的場面において、適切な社会的行動をどの程度自分がうまくできると思うかと定義し、対人不安傾向と公的自己意識との関連を検討している。このように友人やその友人との関係に対する効力感を測定する尺度はあるものの、友人とのジレンマ場面に限定した葛藤を適切に解決できるかどうかに関する効力感を測定する尺度は作成されていない。さらに、こうした葛藤を適切に解決できるという効力感をもつことが、青年の適応にどのように影響を及ぼすかに関するプロセスを検討した研究はみあたらない。そこで本研究では大学生を対象に、友人とのジレンマ場面における葛藤を適切に解決できるかどうかに関する効力感を測定する新たな

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 大学院研究生(指導教員: 中谷素之教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

な尺度を構成し、この効力感が青年の適応にどのように影響を与えるかについて検討する。

さらに、友人とのジレンマ場面における葛藤を適切に解決できるという効力感の背景には様々な心理的要因の中でも、青年の友人に対する価値観が影響していると考えられる。対人関係における価値観や信念に着目した理論の1つであるSVR理論 (Murstein, 1970) では、関係性の発展を3段階に分けて説明している。この理論では、対人関係の発展過程を近接性や相手の容貌、振る舞いなどが重要となるS (Stimulus) 段階、次に価値観の共有が重要となるV (Value) 段階、そして互いの役割を分担して行動することが重要となるR (Role) 段階が想定されている。また、多川・吉田 (2002) では、青年期は対人関係における価値観に変化が生じる可能性があることを指摘し、対人関係観の「協調性・誠実性」と友人に対する信頼の変化との間に正の関連を見いだしている。これらの知見は、親密な関係を形成し維持する過程では、対人関係のとらえ方である価値観をもつことが重要であり、こうした価値観を重視しているかによって相手に対する信頼も異なると考えられる。

しかし、これらの研究は親密な関係を形成し維持する過程を扱った研究であるため、青年自身が友人やその友人との関係をどのようにとらえているかについては明らかではない。実際、多川・吉田 (2002) は、対人関係全般の親密化の過程を規定する要因として対人関係観をとらえているが、青年がもつ友人やその友人との関係における価値観を測定しているわけではない。青年が友人に対してもつ内面的な価値観をとらえることは、現代青年の友人関係における実態をとらえる上で重要なことである。そこで本研究では、友人に対する価値観をとらえる尺度を新たに構成する。なお、この友人に対する価値観は、特定の友人との関係のみにあてはまるものではなく、友人との関係全般に適用できる価値観であるとする。

ところで、青年期の友人関係における適応は、青年の内的適応と関係満足度との関連を扱う研究が多く行われてきた (岡田, 1995; 鈴木, 2002; 高倉・新屋・平良, 1995; 上野ら, 1994)。丹野 (2008) は、友人関係が内的適応に果たす機能に関する研究を概観し、接触頻度が低い状態であっても親密な友人関係を保てていれば、友人関係満足感が高められること、ならびにそうした関係性から得られる満足感によって精神的な不適応を抑制できることを明らかにしている。したがって、青年期の友人関係における適応をとらえるためには内的適応と関係への満足感の両側面からの検討が必要であると考えられる。そこで本研究では、青年期の友人関係における内的適応として自尊感情、関係への満足感として友人関係満

足感を用いることとする。

なお、Argyle & Henderson (1985 吉森訳 1992) は、友人のとらえ方における性差に関して、男性は、友人とは一緒に遊ぶ人であるにとらえている一方で、女性は、友人とは秘密を打ち明けたり、精神的な支えとなってくれたりする人であるにとらえる傾向にあることを指摘している。また、和田 (1996) は、同性の友人関係への期待における性差に関して、男性よりも女性の方が「自己開示」「自己向上」「尊重」を期待し、女性よりも男性の方が「共行動」「情報」「類似」を期待していることを示唆している。このように青年の友人のとらえ方においては性差がみられる知見が示されているため、友人に対する価値観や友人との葛藤解決効力感に関して性差がみられるかどうかについても検討を行う。

本研究における仮説モデル

変数間の因果関係について、本研究では、友人に対する価値観から葛藤解決効力感を媒介し、自尊感情および友人関係満足感に影響を及ぼすプロセスを想定し、構造方程式モデリングを用いたパス解析を行う。以下に検討を行うプロセス間の関連について説明する。

本研究において検討するプロセスでは、友人に対する価値観が葛藤解決効力感に正の影響を与えると推測する。親密な友人関係の形成過程では、お互いの悩みや考え、活動を共有する (高坂・池田・葉山, 2010) という側面だけではなく、友人との葛藤場面にも遭遇する。こうした葛藤場面において友人に対する価値観をもつことは、葛藤を適切に解決できるという効力感につながると考えられる。友人に対する価値観とは友人の重要性を認識していることを示す。友人の重要性を認識していることとは、友人を信頼することができ、その友人との関係全般から安心感を得ている状態である。そして、このように相手を信頼できることが葛藤を適切に解決できるという効力感に影響を与えると考えられる。多川・吉田 (2002) では、対人関係観を規定する要因として、相手に配慮して行動することを挙げている。これらの知見から、友人との葛藤解決効力感を規定する要因として、友人に対する価値観が影響を与えると推察できる。以上の知見を踏まえ、本研究では上記で示した因果関係プロセスを想定し、検討する。

本研究の目的は以下の通りである。

1. 青年期の友人関係の特徴をとらえるために、友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感を構成する各尺度をそれぞれ作成する。
2. 1. で独自に構成した各尺度が青年の適応に影響を及ぼすプロセスについて、構造方程式モデリングによるパス解析を用いて検討する。

方 法

調査協力者と実施時期

千葉県内の大学生273名（男性106名、女性163名、不明4名）を対象に、2010年7月～8月にかけて実施した。全調査対象者のうち、記入もれや記入ミスのあった回答者18名を分析対象から除き、255名（男性99名、女性156名：平均年齢19.02歳、標準偏差1.23歳）を有効回答者とした。

調査の手続きおよび倫理的配慮

講義時間終了後に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。最初に対象者は、フェイスシートに必要事項（所属、性別、年齢）を記入した上で質問項目への回答を始めるように教示された。なお、調査への参加は自由意志であること、無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られること、得られた回答は厳密に保管されることを、紙面（フェイスシート）ならびに口頭で説明した。

質問紙の構成

1) 友人に対する価値観尺度

青年期の友人関係における価値観をとらえる尺度の構成を行った。友人とのジレンマ場面における葛藤を適切に対処するには、相手の価値観を認めることが、友人に対する問題を解決する行動を規定すると考えたためである。友人に対する価値観尺度の構成にあたり、多川・吉田（2002）が作成した対人関係観尺度を参考し、友人に対する価値観を「友人を信頼し、友人との関係の重要性を認識していること」と定義した。

2) 友人との葛藤解決効力感尺度

友人との葛藤解決における効力感をとらえる尺度については、友人とのジレンマ場面で葛藤が生じた際、適切に対処するためには自らの行為や実行によって解決できるという効力感をどの程度もつのが重要であると想定した。さらに、こうした想定他に、具体的な葛藤の発展は、相手とのジレンマ場面における葛藤を事前に予知するといった予防的な側面に着目する必要がある（吉野、1993）という知見を考慮し、友人との葛藤解決効力感を「友人とのジレンマが生じた際、自己を柔軟に調整もしくは変化できること」と定義した。

友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感の各側面を定義した上で、友達とのつきあい方尺度（長沼・落合、1998）や友人関係尺度（岡田、2002）を参考に「友人に対する価値観」と「友人とのジレンマを適切に解決する場面」に相当する項目を想定し、表現と意味内容の適切性および類似性に注意しながら、改変し独自に18項目を作成した。さらに、大学生33名に対して予備調

査を行い、心理学を専門とする教員2名と協議し、逆転項目を追加した上で、最終的に計24項目からなる尺度をそれぞれ作成した。回答は、「非常にあてはまる（4点）」から「全くあてはまらない（1点）」までの4段階評定で尋ねた。なお、教示文については「あなたの友人とのつきあい方についてお尋ねします」とし、特定の友人を想起させるなどの制約は定めなかった。

2) 自尊感情尺度

Rosenberg（1965）を邦訳した山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（全10項目）を用いた。回答は、「非常にあてはまる」（4点）から「全くあてはまらない」（1点）までの4段階評定で尋ねた。なお、山本ら（1982）により、この尺度の十分な信頼性と妥当性が示されている。

3) 友人関係満足感尺度

加藤（2001）の友人関係満足感尺度（全6項目）を用いた。回答は、「非常にあてはまる」（4点）から「全くあてはまらない」（1点）までの4段階評定で尋ねた。なお、加藤（2001）により、この尺度の十分な信頼性と妥当性が示されている。

結 果

尺度構成

因子構造の検討 青年期の友人関係の特徴を友人に対する価値観と友人との葛藤解決効力感の2側面からとらえるために構成された各尺度の因子構造の確認および因子的妥当性を検討するため、全24項目について因子分析（最尤法・promax回転）を行った。固有値の減衰状況および解釈可能性から2因子構造が妥当だと判断し、再度2因子を仮定して因子分析を行った。さらに、複数の項目に高い負荷量を示した項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、最終的に2因子19項目が抽出された（Table 1）。

青年期の友人関係を価値観と葛藤解決効力感の2側面から尺度を構成し、因子構造の確認および因子的妥当性を検討するために因子分析を行った結果、想定通り、友人に対する価値観と友人との葛藤解決効力感の2因子が見いだされた。第1因子は「友人は所詮ライバルなのだから、信頼する方が間違っている（逆転項目）」、「友人は私にとって人生の宝物である」など、友人に対する価値観や信念を示す項目から構成されており、「友人に対する価値観」と命名した。第2因子は「友人と言い争いしても仲直りする方法を知っている」、「友人と意見が一致しなかった時は、お互いが納得するような見解を見つけることができる」など、友人とのジレンマが生じた際、自己を柔軟に調整もしくは変化させていることから、「友人との葛藤解決効力感」と命名した。なお、各因子で信

Table 1 青年期の友人関係の特徴をとらえる各尺度の因子構造および平均値と標準偏差

項目	因子荷量		h^2	M	SD
	I	II			
友人に対する価値観 ($\alpha = .79$)					
友人は所詮他人なのだから、特に親しくする必要はない*	-.80	.07	.59	1.46	0.60
友人と関わったとしても、ほとんど意味がない*	-.75	.06	.52	1.35	0.57
友人は所詮ライバルなのだから、信頼する方が間違っている*	-.74	.14	.47	1.51	0.62
友人は私にとって人生の宝物である	.63	.04	.43	3.51	0.63
友人は所詮ライバルなのだから、本音で語り合うことはできない*	-.62	.06	.35	1.60	0.66
気分がめいている時でも、友人と話していると気持ちが晴れてくる	.58	.14	.43	3.21	0.70
友人と語り合うことで、自分が成長していくと感じる	.56	.08	.36	3.31	0.70
友人は所詮他人なのだから、理解し合えるはずがない*	-.54	-.12	.37	2.14	0.82
友人と関わるのが生きがいである	.50	.11	.31	2.82	0.81
友人は所詮他人なのだから、けんか別れをしても仕方がない*	-.48	-.07	.27	2.11	0.85
友人は所詮ライバルなのだから、対立すると疎遠になってしまうものである*	-.47	.12	.18	1.93	0.71
友人と一緒にいることで精神的に安定できる	.46	.17	.32	3.30	0.64
友人を裏切れることは、自分にとって最も卑劣なことである	.45	-.12	.17	3.00	0.62
友人との葛藤解決効力感 ($\alpha = .76$)					
友人と言い争いしても仲直りする方法を知っている	.04	.76	.55	2.81	0.68
友人と意見が一致しなかった時は、お互いが納得するような見解を見つけることができる	.06	.72	.48	2.79	0.65
友人に誤解された時は、丁寧に説明して誤解を解くことができる	-.09	.65	.49	2.94	0.68
友人に裏切られたと思った時は、自分の気持ちを素直に話して理解してもらうことができる	-.01	.57	.33	2.50	0.77
友人関係の中で、友人との適切な距離の取り方がわかっている	-.04	.51	.28	2.94	0.73
友人に誤解された時、なぜ誤解されたかわからないことがある*	-.16	-.43	.14	2.66	0.71
因子間相関					
	I	II			
	I	-.48			

注. *は逆転項目

傾性係数を算出したところ $\alpha = .76-.79$ であり、いずれもある程度高い値を示していた。また、自尊感情尺度は、多くの先行研究 (例えば;佐久間・無藤, 2003) において、内的整合性の観点により除外されている項目 8「もっと尊敬できるようになりたい」を除いた全 9 項目の加算平均を尺度得点 ($\alpha = .89$) とし、友人関係満足感は、全 6 項目の加算平均を尺度得点とした ($\alpha = .81$)。これらの変数について、分析では尺度得点が高いほど大きくなるように加算した後それを項目数で割り、得られた平均評定値を尺度得点とした。

記述統計および男女間の差 青年期の友人関係の特徴をとらえる各尺度得点について、全体および男女別の平均値、標準偏差を求めた (Table 2)。また、性別によって各下位尺度得点に差がみられるかを検討するため t 検定を行った。その結果、友人に対する価値観の尺度得点において、女性の方が男性よりも有意に高い値が示された ($t(258) = -1.72, p < .05$)。

青年期の友人関係の特徴をとらえる各尺度と適応指標との関連 友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感と適応指標との相関係数を算出したところ、友人に対する価値観は自尊感情 ($r = .14, p < .05$)、友人関

係満足感 ($r = .52, p < .01$) と有意な正の相関がみられた (Table 3)。また、友人との葛藤解決効力感 は自尊感情 ($r = .41, p < .01$)、友人関係満足感 ($r = .58, p < .01$) とそれぞれ有意な正の相関がみられた。

パス解析 青年期の友人関係が適応に影響を及ぼすプロセスについて検討するため、構造方程式モデリング (最尤推定法) によるパス解析を行った。ここでは、友人に対する価値観から友人との葛藤解決効力感を媒介し、適応指標に影響するという因果関係モデルを想定した。これは、友人に対する価値観と友人との葛藤解決効力感が適応指標に同じような影響を与えるというよりも、友人との葛藤解決効力感を用いる背景に友人に対する価値観が影響を与えると推測できるためである。モデル内の変数間の関係は、前段階の変数すべてが次段階の変数に影響するパスを予め仮定した上で、5%水準で有意差がみられなかったパスを削除しながら分析を行った。最終的なモデルの適合度は、GFI=1.00、AGFI=.999、RMSEA=.00 という値を示した (Figure 1)。これらの結果をみると、まず、友人に対する価値観から友人との葛藤解決効力感および友人関係満足感に直接的な影響を示していた (友人に対する価値観 → 友人との葛藤解決効力

Table 2 各尺度得点の全体および男女別平均値と標準偏差

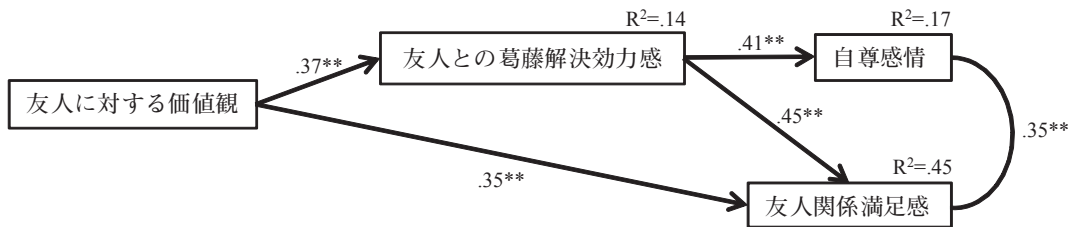
	全体 (N=255)		男性 (N=99)		女性 (N=156)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
友人に対する価値観	3.12	0.38	3.07	0.41	3.15	0.35	-1.71*
友人との葛藤解決効力感	2.72	0.48	2.65	0.53	2.77	0.43	-2.02

* $p < .05$

Table 3 青年期の友人関係の特徴をとらえる各尺度と適応指標との相関係数

	1	2	3
1 友人に対する価値観	—		
2 友人との葛藤解決効力感	.37**	—	
3 自尊感情	.14*	.41**	—
4 友人関係満足感	.52**	.58**	.47**

* $p < .05$, ** $p < .01$



$\chi^2(1) = .042 (.84)$, GFI = 1.00, AGFI = .999, CFI = 1.00, RMSEA = .00

注. 数値は標準化されたパス係数を示している。

** $p < .01$

Figure 1 本研究で採用されたモデルのパス解析モデル

感: $\beta = .37$, $p < .01$; 友人に対する価値観 → 友人関係満足感: $\beta = .35$, $p < .01$ 。次に、友人に対する価値観は友人との葛藤解決効力感を媒介し自尊感情と関係満足感に有意な正の影響を与えていた (友人との葛藤解決効力感 → 自尊感情: $\beta = .41$, $p < .01$; 友人との葛藤解決効力感 → 友人関係満足感: $\beta = .45$, $p < .01$)。しかし、友人に対する価値観から自尊感情への有意な影響は認められなかった。なお本研究では、適応指標である自尊感情と関係満足感の間に共分散を仮定し、分析を行った。これらの結果から友人に対する価値観は、友人との葛藤解決効力感および友人関係満足感を高めているが、自尊感情には間接的な影響しか与えていないことが示された。友人の重要性を認識することは、友人との葛藤を適切に解決できるという効力感を高め、こうした葛藤解決効力感をもつことによって自尊感情や関係満足感を促進するという青年期の友人関係における適応に影響を及ぼすプロセスが見いだされた。

考 察

本研究では、青年期の友人関係の特徴を友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感の2側面からとら

えた尺度を新たに構成した。また、新たに構成された尺度の各側面が、個人内の適応指標である自尊感情と友人関係満足感に影響を及ぼすプロセスについてパス解析を用いて検討を行った。その結果、友人に対する価値観から友人との葛藤解決効力感と友人関係満足感に直接的な影響を与えていることが示された。さらに、友人に対する価値観から友人との葛藤解決効力感を媒介し、自尊感情と友人関係満足感に影響を及ぼすことが明らかとなった。一方、友人に対する価値観から自尊感情への直接的な影響はみられなかった。これらの結果から、青年期の友人関係では、友人の重要性を認識することによって、友人とのジレンマ場面における葛藤が生じた際、問題を適切に解決できるという効力感を高め、こうした効力感をもつことが青年の適応に促進的な影響を与える可能性が示唆された。

友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感尺度と適応指標、男女間の差

青年期の友人関係の特徴を価値観と葛藤解決効力感の2側面からとらえた尺度について、因子分析の実施および因子の妥当性の確認を行ったところ、2因子構造が確認された。また、相関分析の結果、友人に対する価値観

および友人との葛藤解決効力感と適応指標との関係において有意な正の関係がみられた。友人の重要性を認識することと友人との葛藤を適切に解決できるという効力感をもつことによって、個人の内的適応や関係への満足感を高めていた。また、友人に対する価値観および友人との葛藤解決効力感の各尺度ごとに男女差について検討を行ったところ、女性の方が男性よりも友人の重要性をより認識していることが示された。長沼・落合（1998）は、年齢が上がるにつれて次第に男性よりも女性の方が、信頼関係にもとづくつきあい方をするようになることを指摘している。このことから、本研究における性差は先行研究との知見と概して一致するものであるといえる。

友人に対する価値観が適応に影響を及ぼすプロセス

パス解析の結果、友人に対する価値観から友人との葛藤解決効力感への影響が見いだされた。友人との間で何らかのジレンマ場面における葛藤が生じた際、友人の重要性を認識しているならば、友人との葛藤を適切に解決できるという効力感をもつことが示唆された。友人に対する価値観の項目は「友人は私にとって人生の宝物である」などからなり、こうした項目は他者との関係性を重視していることだけでなく、友人に対する信頼の高さも含意するものであると考えられる。信頼は、親密な関係における最も望ましい特質のひとつとされ、理想的な対人関係の基礎をなすものとして取り上げられる概念である（中村・浦, 2000）。Rempel, Holmes, & Zanna (1985) は、親密な関係における信頼が多様な要素からなることを指摘しているが、その中でも最も重要な側面として、相手へ愛情深く好意ある行動をするという個人の信念を挙げている。これらの知見から、友人に対する価値観から葛藤解決効力感への影響を及ぼすプロセスの背景には、友人に対する信頼が関係しており、こうした友人に対する信頼の程度が葛藤解決効力感に影響を与えていたと推測される。

次に、友人に対する価値観から友人関係満足感に直接的な正の影響がみられた。一方で、自尊感情への影響は見いだされなかった。友人に対する価値観は、友人への信頼の高さを示していると推測できることから、友人の重要性を認識することが友人との信頼関係の構築につながり、友人関係満足感を高めたと推測される。また、友人に対する価値観は、友人との葛藤解決効力感を媒介することによって、自尊感情や友人関係満足感に影響を与えることも示された。楠見・狩野（1986）は、大学生では、相手も自分を頼りにしてくれているという相補的關係だけでなく、友人との実際の活動も重視することを指摘している。このことから、友人との葛藤を適切に対処できるという効力感には友人の重要性を認識しているから

ゆえに高められ、こうした効力感をもつことによって適応につながると考えられる。

さらに、友人との葛藤解決効力感から自尊感情および関係満足感に直接、正の影響がみられた。原田（2008）は、相手に自分の悩みを話すことで対処するという「対人接触」を伴うコーピングが、自尊感情と関連することを示している。また、本研究で新たに構成された尺度の項目は、「友人と言い争いしても仲直りする方法を知っている」などの相手を配慮する内容を含んでいる。こうした友人との関係を良好に保つ努力や友人との関係における配慮は、良好な関係を形成し維持するだけでなく、適応にも影響を与える可能性が推察される。

今後の課題の1つ目として、新たに構成された各尺度と従来の尺度との関連性について検討する必要がある。本研究では、友人に対する価値観と友人との葛藤解決効力感の2側面から尺度構成を行ったが、青年期の友人関係の特徴には内面的友人関係（岡田, 1999）や、ふれあい恐怖的心性（岡田, 2002）などの側面も含まれる。今後は、友達とのつきあい方尺度（落合・佐藤, 1996）などの既存の尺度との関連から各尺度の収束的妥当性を検討する必要があるだろう。

2つ目として本研究では、大学生を対象としており、発達の差異を検討していないことである。Buhrmester & Furman (1986) は、青年期を通じて、友人関係の重要性が急激に変化することを指摘している。このことから、中学生や高校生などの異なる年齢段階における友人に対する価値観を比較することにより、友人に対する価値観が異なる年齢段階のどのような要因によって高められるのかについて検討する必要があるだろう。

引用文献

- Argyle, M., & Henderson, M. (1985). *The anatomy of relationships*. Methuen: London. (アーガイル, M.・ヘンダーソン, M. 吉森 謙 (訳編) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Buhrmester, D., & Furman, W. (1986). The changing functions of friends in childhood: A neo-sullivanian perspective. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (eds.) *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag, 41-62.
- 藤井恭子 (2001). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対

- 人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- 原田宗忠 (2008). コーピングが自尊感情の変動性と自己概念に与える影響 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 639-650.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について 社会心理学研究, 18, 78-88.
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地 (2010). 中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連 青年心理学研究, 22, 1-16.
- 楠見幸子・狩野素朗 (1986). 青年期における友人概念発達の因子分析の研究 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 31, 97-104.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, 46, 21-30.
- Matsushima, R & Shiomi, K (2003). Social self-efficacy and interpersonal stress in adolescence. *Social behavior and Personality an international journal*, 31, 323-332.
- 宮崎章夫 (2011). 認知症の攻撃的言動に関する介護職員の対処効力感尺度の信頼性と妥当性 健康心理学研究, 24, 22-32.
- Murstein, B.I. (1970). Stimulus-value-role: A theory of marital choice. *Journal of Marriage and The Family*, 32, 465-481.
- 長峰伸治 (1999). 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究 対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討 教育心理学研究, 47, 218-228.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 中村佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について 対人関係の継続性の視点から 社会心理学研究, 15, 151-163.
- Newcomb, A.F., Bukowski, W.M., & Pattee, L.A. (1993). Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglect, controversial and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 パーソナリティ研究, 10, 69-84.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の種類と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- Rempel, J.K., Holmes, J.G., & Zanna, M.P. (1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 95-112.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12, 73-82.
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係の自己の変容性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 48, 353-360.
- 鈴木有美 (2002). 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康 共感性およびストレス対処との関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 145-155.
- 多川則子・吉田俊和 (2002). 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 青年期の恋愛関係と友人関係 対人社会心理学研究, 2, 65-73.
- 高倉 実・新屋信雄・平良一彦 (1995). 大学生の Quality of Life と精神的健康について 生活満足度尺度の試作 学校保健研究, 37, 414-422.
- 丹野宏昭 (2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, 20, 55-69.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 和田 実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 吉野絹子 (1993). 対人的葛藤の解決過程の分析 (2) 個人の反応パターンのタイプとその個人特性 社会心理学研究, 8, 222-234.

(2014年8月29日受稿)

ABSTRACT

Effects of adolescents' friendships on their adaptation
Focusing on friends' values and on conflict resolution efficacy for friends

Koichi KANEKO and Motoyuki NAKAYA

Friendship of adolescence, is an important aspect that affect mental health and adaptation of individual. However, findings indicate the presence of youth to explore the relationship between friends is also seen. In fact, while maintaining an excessive psychological distance with partner, adolescents are afraid that the partner is hurt. Further, Newcomb, Bukowski, & Pattee (1993) has point out that lack of conflict solving abilities constructive with peers is associated with maladaptive, such as social rejection. Therefore, adolescents it is necessary to properly resolve the psychological conflict with friends. In this study, we focused on the efficacy on if adolescents can properly resolve conflict in conflict situations with friends. Then, the background with efficacy in conflict situations with friends, I was assumed values about whether to recognize the importance of their friends is present.

This study constitutes the new scales, examined friends' values and conflict resolution efficacy for friends, and investigated adaptation processes in adolescent friendships. Scale for adaptation of the adolescents was a friendship satisfaction and self-esteem. In addition, it examined that gender differences even whether seen in the new scales. A self-report questionnaire was administered to 273 undergraduates. Result of factor analysis for the scale was newly constructed, as expected, showed two-factor structure. And for those factors, it was designated as "friends' values" and "conflict resolution efficacy for friends". A significant correlation was found between the two factors that made up each subscale of the new scales, and a positive relationship with each adaptation indicator was shown self-esteem and friendship satisfaction. There are gender differences in the friends' values is a subscales of the new scales, that women who are more aware of the importance of friends than men has been revealed. Furthermore, structural equation modeling indicated that directly affects friends' values and a friendship satisfaction, friends' values and conflict resolution efficacy for friends, indirectly affects self-esteem and friendship satisfaction mediates by conflict resolution efficacy for friends. These results suggest that friends' values pertaining to relationships with reliable friends and appropriate conflict resolution efficacy for friends affected adaptation processes in adolescent friendships. Rempel, Holmes, & Zanna (1985) suggested that personal beliefs as the most important aspect of trust in intimate relationships that the action showed the favor and affection to the other is important. From these findings, the background of the process of conflict resolution to efficacy, there is a possibility that the trust to a friend is involved from friends' values. Moreover, to conscious relationship with friends and effort to keep a good relationship in relation to friends so that they are not bad, also affect the adaptation of youth is not only related to the maintenance and formation of a good friendship there is a possibility.

Future issues, it is necessary to examine the convergent validity from association with other mea-

asures and friendship scale. And, there is a need to compare friends' values whether to develop in any age stage.

Keywords: friends' values, conflict resolution efficacy, self-esteem, friendships satisfaction, adolescence